2015年10月　日本線維筋痛症学会　報告　　浦野房三

10月3日および4日、東京、新宿のベルサール新宿グランドコンファレンスセンターにて、第7回日本線維筋痛症学会が開催された。学会長は東京医科大学八王子医療センター・リウマチ性疾患治療センター岡寛教授が務められた。学会のメインテーマは「Think together」と意義深いフレーズであった。
第１日目の会長講演は岡寛理事により、近年使用頻度の高いプレガバリン、デュロキセチンの解説に加え、代替療法、運動療法、心理療法の有用性についても開設された。また、1日目の目玉は、近年国内外で大きな問題となっているヒトパピローマウイルス関連免疫異常症候群（ＨＡＮＳ）の病因病態の解明に向けてというセッションであった。西岡理事長ほか、横田俊平副理事長、平井利明氏、池田修一氏、黒岩義之氏、松本美富士副理事長の６先生が発表した。理事長講演では今回、西岡理事長がSAPHO症候群について詳しく述べられことは意義深いことと考える。
線維筋痛症は主症状が広範囲性疼痛であり、自律神経系、精神医学の領域を合併症として含んでおり、多彩な症状を訴える事が多い。通常診療の検査データでは病状を反映したバイオマーカーはまだ、見つかっていない。また、線維筋痛症の中には強直性筋収縮型にIsaacs症候群、甲状腺ミオパチー、乾癬性関節炎、掌蹠嚢胞症性骨関節炎、HPVワクチン関連神経免疫異常症候群(HANS)などの混在を西岡理事長は述べている。
教育講演のなかではエーテル学院大学人間福祉心理学科の田副真美氏が線維筋痛症患者への交流分析的アプローチとして、エコグラムを治療に生かす試みを発表した。ストレスと行動パターンの関連がわかり、患者の自己理解が深まるという。
また、信州大学脳神経内科、リウマチ・膠原病内科の池田修一氏は子宮頚癌ワクチンの副反応と自律神経障害について講演し、脳SPECT画像でも異常所見がみられることから、子宮頚癌ワクチンは末梢神経から脳に至るまで、神経系の広汎な領域に障害を起こしていることが推測されると講演した。
また、北海道大学衛生学の若尾宏氏は線維筋痛症候群・脊椎関節炎鑑別マーカーとしての自然免疫型T
細胞について講演し、マイト細胞は線維筋痛症とその類似疾患を鑑別しうる生体マーカーと述べている。
筆者は教育講演とスポンサードシンポジウムの２講演を行った。両者とも、DMARDsに関連して、線維筋痛症と脊椎関節炎の鑑別とその治療について述べた。